

平成28年 産業研究所
愛媛県松山市まちづくりプロジェクト参加学生
報告書



関西学院大学 産業研究所

■プロジェクトの概要・目的：

愛媛県松山市で行われる、まちおこしの一大イベント「全国ご当地こなもんサミット」への運営参加を通じて、まちおこしについて学びます。

松山市では、古くから本州との結節点として栄えた「三津浜地区」を活性化するために、三津浜地区ブランド化プロジェクトを進行させています。中でも名物である「三津浜焼き」を通じた三津浜地区のPRに力をいれており、平成25年度より三津浜焼きを「こなもん」の代表としてPRするためのイベント「こなもんサミット」を毎年開催しています。

地域の課題である、①三津浜ブランドを確立すること、②集客イベントを行うこと、を目的に、地域資源である三津浜焼きを活用して、学生と地域による新しい取り組みを行い、地域と学生が連携し、新しい地域のブランドを作っていくという企画です。

■活動内容：

①「実行委員会」へのヒアリングとレポート

「こなもんサミット」を主催する三津浜地域の住民団体「平成船手組」や市役所等に対してヒアリングを実施し、現状の課題、今後のあるべき姿などを模索します。



②「こなもんサミット」におけるボランティアサポート

「こなもんサミット」とは…

今年で4回目を迎える全国で唯一「こなもん」のみにテーマをしばった全国規模のフードバトル。合計26店舗が全国から集結して、参加者の投票によってグランプリを競います。昨年度は二日で約1.5万人が訪れました。プロジェクト参加者は、ボランティアスタッフとして、「こなもんサミット」をサポートします。

■日時・定員

日 時：2016年11月5日（土）～6日（日）

■参加者

社会学部女子学生1名（2年生）
経済学部女子学生1名（3年生）
国際学部男子学生1名（3年生）

■受入先

ご当地こなもんサミット実行委員会事務局
（松山市役所、商工会議所、平成船手組、愛媛大学）

■目標（各自が設定した参加当初の目標）

- ・まちづくりの現場を自分の目で見て耳で聞いて体感し、その中で、三津浜焼きのブランド化のプロセスを学ぶ。
- ・現在、どの地域においても重要なものとなってきている町おこし活動に直接触れ、実際の仕事や重要なことは何かを学ぶ。そして、自分には自分の暮らす地域の町おこしの為に何ができるのかを考える。
- ・地方が抱える課題の把握と商品のブランド化についての理解を深める。

■実施内容（学生の報告書より）

<11月5日（1日目）>

- ・こなもんサミット、ゆるキャラグランプリ、松山城などの観光資源について学ぶ
三津浜地区のまちづくりに携わる方々との懇親会
- ・こなもんサミットの見学、松山市の観光資源の魅力発見、懇親会
- ・フィールドワーク・親睦会

<11月6日（2日目）>

- ・こなもんサミット会場でスタッフとして列整備や呼び込み
- ・こなもんサミットでのボランティア
- ・現地の人との交流・ボランティア活動

■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・1つ目は三津浜地区では、まちづくりの担い手が行政に限定されておらず、行政と企業と大学生という3つがインタラクティブに協力してまちづくりのプロジェクトを進めているということである。特に、学生も大きな役割を果たしているということが三津浜地

区のまちづくりの特徴であると考えられる。一般の住民が問題や課題を陳情するよりも学生から提言をした方がより行政は柔軟に動くことができ、若者だからこそその発想が、行政の潜在力を引き出しているのではないかと考えた。また、三津浜ガイドブックの制作にあたっては学生の力が大きく、三津浜焼きのみならず伝統や歴史、文化の集積した三津浜市区の魅力を、お金を外部にキャッシュアウト(例えば食べログで広報した場合、掲載料に加え、割引クーポンもつけることになる)せずに、広報できていた。

2つ目は同じ地域に住む人としての共通の「三津浜を愛する」という想いが、三津浜地区を盛り上げるイベントやブランド化のプロセス、そして結果につながっていることである。三津浜焼き推進プロジェクトの担い手の人々の熱い想いに応えるように、こなもんサミットでは見事三津浜焼きが全国のこなもん 1 位に輝いたが、それは三津浜焼きを愛している地元の人々からの投票があったからこそだろうと、愛媛大学の学生と話したことが強く印象に残っている。

- ・このプロジェクトを通し、実際のまちおこし活動がどうやって動いていったのかということだけでなく、様々な人の力や熱意、繋がりが町おこし活動において非常に重要であることを学ぶことができました。沢山の方からこなもんサミットや松山市への思いを聞くことができ、その思いの強さに驚かされるとともに、この熱意が多くの人を共感させ、サミットを成功させたのだということ学びました。このことは私自身、懇親会で話を聞いたことで翌日の手伝いにより身が入ったため特に強く感じました。また、本当に多くの、様々な人が関わっており、町おこし活動において様々な立場の人にそれぞれのできる仕事があるということ学ぶことができました。
- ・本プロジェクトで私は、「人」がいかに大切な役割を担っているかを実感した。地方都市は、経済力を強みとする大都市とは違い、「人」という財力が強みである。しかし、実際、現地で抱える問題に、「人の流出」などが課題として挙げられた。すなわち、人の流入を活発化させるキックオフが必要なのだ。文化遺産や温泉などその土地が普遍的に保持されるブランドに加え、「地域の名物●●」等、他地域では体験できないもの、かつ流動性を帯びたブランドを用意することが必要である。今回のような三津浜焼きのブランド化という新たな取り組みに着手したことは松山の振興に寄与する画期的な第一歩であると思う

■今後の学生活動について（活かしたいこと、課題）

- ・今回の反省点として、知りたかったことをうまく聞けず、ヒアリングが十分に行えなかったことが挙げられる。同世代の学生からはたくさんのお話を聞くことができたが、市役所の方や平成船出組の方と話す時間が短く、自分自身も仕事の邪魔にならないようにとタイミングを見計らい過ぎていたことが悔やまれる。今後は時間を有効活用し、自分からインタビューしに行く積極性を身につけたい。

また、学生のうちにまちづくりの現場に積極的に足を運んでいきたい。なぜなら授業

で地域のまちづくりには地域に人ではない外部の人の介入が重要であると勉強したが、三津浜地区では地域の、地域を愛する人によるまちづくりがうまくいっているし、自治体消滅論や合併理論では片づけられるものではなく、地域の人があれば、地域のコミュニティは変わらず、活性化できるということを感じたからである。授業で学んだり、本で読んだことはあくまで理論であり、実践とは異なることもあるので、実際に現地へ赴き、それぞれの地域に合ったまちづくりのあり方に注目していきたい。

- ・今回感じた相手の心を動かすような熱意は何をするにも必要となると思うので、私自身も何事にも熱意ある姿勢で臨むよう心がけたいと思います。特に、同じ大学生である愛媛大学の方と話し、その知識や熱意など本当に見習わなければならないと感じました。また、私は自分の暮らす地域の魅力について、ただの情報ではなく実際にはどうなのかということをおそらく知らないということにも気づかされました。地域の魅力について自分自身で見に行くことが大切で、同じ魅力を伝えるにあたって感じ方が全く違ってくことを強く感じました。実際に体感しなければ分からないことも多いということは心に留め、これからはもっと何事にも積極的に関わるようにしたいです。
- ・私は現在、「日本⇒海外」という視点から「海外⇒日本」という視点へと視野を広げている。日本人はともかく、外国人が日本を見つめる際、どうしても日本一国という単位で評価されがちで、様々なユニークさを秘めている地方都市の魅力が世界に知られていないところに私はコンプレックスを感じている。今回のプロジェクトで得た地方都市が抱える「課題」と売り出せる要素となる「良さ」を念頭に、国と各都市という二つの単位で再度日本を見つめ直したいと考えている。またこの検証を応用し、「日本ブランドの輸出」戦略を私なりにまとめていくことを目標としている。